
蝶舌暗宙夢

ミルメコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蝶舌暗宙夢

【Nコード】

N0473H

【作者名】

ミルメコ

【あらすじ】

少女たちの不可思議な日常・非日常。

いろいろな時代、視点から進めていこうと思います。

カマイタチ

カマイタチ

つきがごろごろと音を立てて廻る夜だった。

埃が残る樹の匂いの舞う濡縁に腰掛けた少女は、ちりちりと痛む喉を其の冷たい気で満たした。

心地よい疲れと眠気を通り越した覚醒の中、微かに白檀の香の漂う着物の袖を弄んでいた少女はふと顔を上げると動きを止めた。

視線が捉えていたのは月闇に白く浮かび上がった一体の獣の屍だった。

「カマイタチ？」

「ええ、最近此処ら辺一帯に出るそうで、奴に引つ搔かれたという者が後を絶たないんですよ」

「はあ、しかし何故鎌鼬なんですか？」

「それが皆、血が流れずに肉だけ裂かれたとか言ってる」

「そうですか・・・まあゆめゆめ襲われないように気をつけて帰るとしましょうか」

軽く冗談めかして言った男は、外套を羽織り、帽子を被り直すと席を立った。

「無花果？」

女は娘の名を呼ぶと、部屋の襖を引いた。

畳に座った少女は人形の髪を梳いていた手を止めると振り向いた。

「ああ良かった、此処に居たのね」

母親は少女の頭を撫でると言った。

「もうお夕飯が出来るからお部屋にいらっしやい」

少女が頷くと母親は部屋を出て行った。

居間に行くと、侍女が慌てた様な顔をして立っていた。母親を見とめると彼女は言った。

「イタチが・・・今夕食の魚を捕って逃げていきました・・・」

「イタチ？」

「はい、今部屋に入ったらちようど逃げていって」

やがて家の者がイタチを捕まえると、其れは檻に容れられて奥の部屋に置かれた。

夕食を済ませた無花果の頭の中はイタチのことで一杯だった。近頃町を騒がせている鎌鼬のことはあまり家から出ない彼女でさえ聞いたことがあった。

そして昨晚に見た獣の死体。すぐに家の者に見つかって片付けられたが、あの獣は傷ついてはいたものの血を流していなかった。鎌鼬に襲われても血は流れないという。其れは鼬が血を吸うためだとか、薬を塗るためだと言う。昨日の獣が血を流していなかったのは其のためではないだろうか。あの獣の血を吸ったイタチが今日になつて見つかったのではないか。

およそ有り得ないこじ付けがましい話であつたとしても、今の彼女にはそう思えて仕方がなかった。

其の夜、無花果は皆が寝たと思われる時間になると静かに寢床を出た。言わずもがな、イタチを見るためである。侍女たちの話を聞いたところ、イタチは普段使われていない奥座敷にいるらしい。

明かりが消えた廊下はいつもより床が軋むような気がする。誰かが来たとしても水が飲みたくなつたと言えがいいのだ。そう自分に言い聞かせながらも爪先は冷水に足をつける時のように強張っている。イタチが居る部屋の前に来ると無花果はそつと襖を引いた。

僅かに開いた隙間から此方を見るイタチの目玉が少し光つたような気がした。イタチが寝ているのではないかと思つていた少女は、其の紅い玉が此方を捉えたことに少なからず動揺した。其のすぐ後にイタチが騒がなかったことも逆に少女を怯えさせた。イタチは何

の感情も表さずに只此方を眺め、動く素振りも見せなかつた。

暫く経つと、少女は襖をもう少し引いて部屋に身を滑らせた。無花果が檻に近づくと、イタチは白い尾を少し動かした。無花果はイタチを隅々まで舐める様に凝視した。

僅かに入る月の光が其の身体を銀色に輝かせ、檻に容れられた獣はとても神秘的なもの様に見えた。黒光りする爪は張った糸に触れさせただけで其れを切つてしまいそうだった。

無花果はゆつくりと檻に指を滑りこませると其の更紗の様な毛皮に触れた。刹那、鋭い爪が月光に煌いたと思うと彼女は指先に刺すような痛みを感じた。そして其の未だあどけなさを残す指は闇に笑う三日月の様に裂かれていた。

月が雲に隠れて辺りが暗くなるのが分かった。無花果は部屋を出るとゆつくりと襖を閉めた。

東雲が赤みを帯びた空に漂った。

家の者の皆が落ち着かないのを無花果は見取った。皆敢えて口にはしないものの、かのイタチが巷を騒がす鎌鼬と繋がりがあるのではないかと思っているのだ。

無花果がイタチを見に行ったことを知る者は誰もいないようであった。彼女はちりちりと痛む指先に、紅い着物の袖を被せた。

その次の日のことであつた。一人の男が家を訪ねてきた。

「此方にイタチが居るとお聞きして参つたのですが」

「私は自然科学の研究をしています。木籐と申します。近頃鎌鼬の事で持ちきりでしょう。役所から実態を調べる様にと通達が下りたんです。」

目深に被つた帽子の縁に色素の薄い髪が靡いていた。眼鏡を掛けた男は穏やかそうな雰囲気を纏っていた。しかし彼はふとした時に凄切切れ者のように見えるから不思議であつた。でもそれは、賢い者

が其れを欺き隠そうとするのではないかという、人間に対するある種の不安から来る、只の思い過ぎだったのかもしれない。

男はすぐにイタチが居る奥の間へ通された。

木藤はイタチに目線を合わせて屈むと暫くの間其れをよく観察した。顔を上げると、彼は安心させるように微笑んだ。

「只のイタチですよ。里の方まで迷い込んでしまったんでしょう。鎌鼬というのは迷信で、実際は気化熱によって急激に冷やされるために皮膚が裂けただけなんです」

其処に居た皆が安堵の色を見せた。しかし、端の方で話を聴いていた無花果だけは取り乱した様に首を振った。

「違います、わたくし、鎌鼬に指を裂かれました」

皆が一斉に彼女の方を向くと、無花果は着物の袖から手を出した。しかし今朝まであった傷は跡形もなく、白い指は細やかに震えた。

「いえ・・・確かに傷があつたんです、わたくし見たんです・・・指の先が裂かれたんです。鎌鼬に引つかかされると血が出ないので、其の時も血が出なかつたんです。本当なんです・・・」

気が違った様に繰り返す少女を皆が憐れむように見た。木藤は言った。

「お嬢さんもいろいろな事があつて疲れているのでしょう。ゆっくり休ませてあげてください」

無花果はもう言葉を紡ぐことも出来なかつた。只彼女は黙って滑らかな指先を凝視していた。

メクイオニ（前書き）

久しぶりすぎて返す言葉がありません。

メクイオニ

竹は互いの身をぶつけ合い、奇妙な音を立てていた。でも其れは只の錯覚なのかもしれない。あんなに硬くて太い樹が風に揺れるはずがない。

竹の匂いを一杯に吸い込もうとしたが、鼻腔を満たしたのは初夏の風の冷たさだった。

私は竹の間の灌木に腰掛けた二人の少女を見ていた。全く同じ面立ちをした彼女らは私が其れを見分ける事はできなかった。綺麗に切り揃えられた黒髪が小さな顎に掛かっていた。只黙って己を見る私を彼女らは目に入れていないかどうかすら怪しかった。竹の身に遮られて薄くなつた光が白い頬を一層際立たせた。

「人造妖怪だよ」背の後ろの声は言った。振り返ると其処には一人の老人が立っていた。

「私が昔造つたものなんだ」

彼の声は老人の其れとは思えない程透き通っていた。

「貴方が？」

「ああ、小梅と白梅というんだ」

老人は其々を指差しながら言った。

もう一度顔を上げた時、老人はもう其処には居なかった。

「死んじやつたの？」

其の声は鈴を振つたというよりも、夜中に氷を落とした水に似ていた。

「もう使えないかしら」

同じ声だが、紡がれた唇は違っていた。

瓜二つの頭は一人の男の死体に傾いていた。そして死体は空飛ぶ鳥を眺める時の様に穏やかな瞳をしていたのだった。

そして其の両の眼を白い手が抉った。其々の両手に眼玉を乗せた少

女は互いに優しく微笑み合った。

「なんて綺麗なんでしょう」

割りぬかれた眼は雨上がりの花露の如く虹色に輝いていた。

少女たちは両手を唇に近付けると、其れを口に含んだ。

「美味しい」

恍惚とした様に少女は呟いた。

晩夏の夕顔が、涼やかな音を立てて開きはじめた。

「お譲ちゃんたち、近頃は鎌鼬が出るって言っから早く帰りなさい」
初老の女に声を掛けられた少女たちは同じ顔をした小首を可愛らしく傾げた。

「鎌鼬が出るの？」

「そっだよ。紅い眼をしたとても恐ろしい化け物らしい。引っ掻か
れたりしないように気をつけて帰るんだよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0473h/>

蝶舌暗宙夢

2010年12月7日03時03分発行